

焼け出されたニーニョ・コンパドリート

加藤隆浩（関西外国語大学・非常勤研究員）

キー・ワード： ニーニョ・コンパドリート、民衆カトリシズム、クスコ、神話化

Niño Compadrito Burned Out of His Chapel

TAKAHIRO KATO (Kansai Gaidai University, Research fellow)

Keywords: Niño compadrito, popular catholicism, Cusco, mythicization

1. はじめに

ニーニョ・コンパドリート（以下、NC）はペルークスコ市の民衆聖人（カトリック）である。ミイラ化した子供の骨格に、かつら、マントなどを着せ、カトリック聖人の形状に似せて作られている。1950年ごろからその信仰についての証言があり、70年代に信者数が急拡大、それに危機感をおぼえたカトリック教会の弾圧がはじまる。そして信者らの地下活動が開始され、それは、弾圧した大司教らのミステリアスな死まで続いた。「復讐する聖人」という民衆の解釈はその地下活動の中で形成されたが、結局両者は相手に対して無関心を決め込み休戦。その間にNCは「復讐」というイメージをトーンダウンし、信者を再度獲得し安定期を迎えた。そしてNCはクスコの他のシンクレティックな聖人同様、そのまま民衆聖人の地位を確立すると思われた。しかし2021年7月23日礼拝堂から出火。NCは焼け出され、NCはこれまでにない大きな変化を余儀なくされた。

2. 火災についての言説

そこで本報告は1990年から行ってきた定点観察の成果 [Kato 1996:2000] を引き継ぐ形で火災にあったNCがどのように語られ、歴史化・神話化してきているかを検討することにした。なお、[Kato 1996] ではアブラン・バレンシア [Valencia 1983] の史料を再検討しデータを補強、NC信仰の史的展開 (-1994) の輪郭を示し、[Kato 2000] では、夢を媒介に語られてきたNCの「成長の記録」を口頭伝承を使って分析している。したがって以下では以上を踏まえ、1994年以降2022年8月までのNCについての語り

を置く。

すでに述べたように、カトリック教会から異端のレッテルを張られたNCは地下活動を停止すると、民衆の前に「呪詛の聖人」「黒蠟燭の聖人」として登場した。そのイメージは強烈で、1990年8月に初めてNCを見た時も、所有者宅の中庭に設えられた狭い礼拝所で奉獻される蠟燭はすべて黒色だった。しかし1994年はNCへの黒蠟燭の奉納をひかえようという聖像の所有者から信者への要請が示され、他方、親（pro）NCの神父が、NC像とその信者を教会に入れてミサを行い、その中でNCの神学的位置を説明するという画期的な試みがなされ、期せずして未必の歩み寄りが見られた。それ以来、NCに対する信者のまなざしは、呪詛一本やりの聖人から、各種試験の合格、健康増進、病気平癒、恋愛成就、家内安全など様々な分野での靈験がみとめられることになる。こうして、黒蠟燭が支配的であった礼拝堂に少しずつ白い蠟燭が見られるようになり、2010年代に入ると、礼拝堂が道路側に新築され、そこには、白と黒だけでなく、赤、黄、青、橙、緑、紫、ピンクの蠟燭が現れ、同時に多くの生花で飾られるようになり、かつての「闇」のイメージは完全に消えた。こうしたイメージチェンジのおかげもあってか、NCの知名度は上がり、来訪者数も、信者数も右肩上がり伸びた。こうなると、教会も多くのカトリック信者を獲得している功績を考えれば、教会はそれを見無視することはできず、ましてや、教会がかつてのようにNCに対し追撃、没収、破壊することは無いと思われ、NCは安定期に入り、このまま伸び続けるだろうと見られていた。ところで、ここで予想だにしない事件が突発した。2021年7月

23 日夕方のNC礼拝堂の焼失である。

この忌まわしい出来事を機に、所有者の家族は礼拝堂の閉鎖を考えたが、火事から1年ほどして、信者の要請に応える形で、信者の受け入れを再開した。これにより、参拝に訪れる信者とNCの聖像を管理する家族との交流の場ができあがり、火災以前と同様、NCをめぐる情報交換が活発化することになった。口頭で生成される語り、突如起こった火事に見舞われたNCの歴史、神話化の断片になっていくものである。ただし、予め注意すべきは、そこで語られたことが、直ちにそのままの形で歴史として、あるいは神話として認められるわけではないという点である。

そこで、以下に覚え書きのように記しておくのは、2022年8月の時点で、NCが被った火事についての主な語り（採集時点でまだ断片である）を記しておく。

- 1) NCを30年ほど元所有者（ファン・レトナ氏2020年9月没）が、火災を予言していた。
- 2) 火災は蠟燭の不始末に起因するだろう。
- 3) 予言を無視した家族は出火時に、火傷をし、傷う跡が残っている。
- 4) 新型コロナウイルスのためにNCへの参拝者が増えた。
- 5) 出火の原因は、電気配線のショートではなく蠟燭の火である。
- 6) ミステリアスな弁護士が現れ、一度に大量の蠟燭に点火した。
- 7) 礼拝堂は焼失したがNCは無傷のまま残った。
- 8) 火災の燃えカスを集め、呪物にしようとする信者が多数いた。その光景はタキオンコイや偶像崇拜撲滅運動への先住民側の反応を想起させる。
- 9) 奇跡的な消火活動

3. おわりに

この報告にはNCの近況をカルトの動態とそれを生み出す主要要素を取り上げ分析をする際に、役立ちそうな言葉、フレーズをメモしたものである。したがって、この発表にはもとより結論はないが、次の2点だけ述べておきたい。

1. かつてNCの歴史、意志、願望等は夢を媒介に告知されることが多かったが、近年カラー蠟燭の出現とその導入によって大きな転機を迎えている。
2. 火事という出来事を超自然的な現象と捉えようとする言動が見え始めている。

【主要参考文献】

- Kato, Takahiro, 1996, Breve historia del Niño Compadrito del Cuzco. In *Tradición Andina en Tiempos Modernos, Senri Ethnological Reports 5*, ed. H. Tomoeda y L. Millones, pp.31-47, National Museum of Ethnology, Osaka.
- Kato, Takahiro, 2000, Historia tejida por los sueños: formación de la imagen del Niño Compadrito, *Desde afuera y desde adentro, Senri Ethnological Reports 18*, ed. L. Millones, H. Tomoeda, y T. Fujii, pp.159-190, National Museum of Ethnology, Osaka.
- Valencia, Abraham, 1983, *Religiosidad popular: el Niño Compadrito*, Instituto Nacional de Cultura Cusco.